之一種也、

〔倭訓栞前編三十一〕むべ○中略　和名抄に郁子(ムベ)と訓ず、延喜式諸國貢進の菓子に近江國郁子と見えたり、今も蒲生郡白部村より霜月に貢せり、麥わらにて小さき殿を作り、其内に赤く熟したるを釣さげたり、むべは御贄をおほむへとよめるの略也、今俗ときはあけびといひ、花肆には朝鮮あけびともいふ、本艸にいふ蔓子、齊民要術にいふ藤韶子なりといへり、南部に木まんぢうといふ、又詩經の薁をむべとよめり、薁と郁と同音なるをもて、郁子と書りといへり、土人此葉を煎じ癰腫を洗ふ、よく平愈すといふ、

〔古今要覽稿草木〕むべ野木瓜　郁子　薁實　漢名　ときはあけび、

むべは近江國蒲生郡奥島の產物にて、毎年十一月朔日、京都へ貢する也、蔓一すぢに二つも三つもなりたるを、藁にて包たる足高き折に入て奉る、其形狀圖(圖略)のごとし、此事いづれの御時よりはじまるといふことさだかならず、

奥島供御人等が傳ふる所は、聖德太子の御時よりといひ、或說には天武天皇御時よりといふ、共に信じがたし、さればこそ後水尾院年中行事には、いつより奉りそめけるにかと遊ばされしなり、又延喜式に近江より郁子を貢することを載られたれど、これは今のむべの事にや、眞の郁李のことにや、さだかならず、供御人等が傳へし文安の綸旨に見へたる所は、今のむべのことにて有べければ、其文に例にまかせてと見えたるに據ときは、その先より奉けるものなるべし、

さて文字には郁子とも薁實とも書たれ共、ともに正しき名とはおもはれず、蘭山翁の說に、救荒本草にみえたる野木瓜といへるもの、今のむべなりといへり、其圖說を按ずるに、此說荷擔すべきなり、